れた。邦產では外にクモノスシダ屬がこの科に入る。

Polypodiaceae も亦大きな科で 65 屬を含みヤブレガサウラボシ，スヂヒトツバ屬もここに入つて居り，外にエゾデンダ，ノキシノブ，クリハラン，マメヅタ，クラガリシダ，キリガタシダ，ヒトツバ，ヌカボシシダ，オキナハクリハラン，イハヒトデ，ミツデウラボシ，ヒメウラボシ，オホクボシダ，サジラン，ナナメシダ，イハクジヤクシダ等の諸屬が入る。エゾデンダ屬 (*Polypodium*) には *Marginaria* Bory が含まれ，ノキシノブ屬には *Pleopeltis* が用ひられて *Lepisorus* はその異名とされ，クリハラン屬には *Neocheiropteris* が用ひられて居る。ヒトツバ屬 (*Pyrrosia*) の中には *Cyclophorus*, *Niphobolus*, ビロウドシダも入り，ヌカボシシダ屬 (*Microsorium*) は *Phymatodes* を含む意味に用ひられ，オキナハウラボシ，ミヅカザリシダ等もこの屬に入つて居る。併しヤノネシダは *Pleopeltis* に入るべきと考へて居る。オキナハクリハランは新屬として *Paraleptochilus decurrens* Copel. と名付けられ，オキノクリハランは *Dendroglossa* に入るものとされた。ミツデウラボシ屬には *Phymatopsis* より古い *Crypsinus* Presl (1849) が採用され，ミヤマウラボシ，タカノハウラボシ等も入つて居る。オホクボシダは *Xiphoteris* Kaulfuss に入り，*X. Okuboi* Copel. となつた。

シシラン科 (Vittariaceae) は 9 屬を含み，タキミシダ，シシラン，イトスゲシダ屬等が入り，非常にはつきりした自然的な群で特に前葉體の構造に特徴がある。

Hydropterides は Filicales 中に置かれ，デンジサウ科とサンセウモ科があり，屬の區別は從來と變りない。

本書の分類を見ると，羊齒類の全種類を目前に並べて見て，この中から近緣のもの，系統の近いと思はれるものから集めて行き，實際に扱ひ易い大きさのものを屬とし，又どこへも入れ難いものを別に扱つて，下からまとめて行つたと云ふ感じがする。各々の屬や科がその記載や特徴を讀んだだけではどうしてそこで區分したのかはつきり分らない場合もあり，その屬としては例外な特徴をもつた種が入れられて居る事も少くない。從つてこの分類系を批判するには非常に廣い視野から行はれなければならないと思ふ。

○メタセコイアの葉序の疑問　（前川文夫）

本誌 22: 58 でメタセコイアの葉序について論じた處で，生きている化石として四川省での發見があつたことを一寸報じて置いたが，その後下の二文を見たことから若干の記述を加える。

Merrill, E.D. A living *Metasequoia* in China. Science 107: 104 (1948)

Hu, H.H. et Cheng, W.C. On the new family Metasequoiaceae and on *Metasequoia glyptostroboides*, a living species of the genus *Metasequoia* found in Szechuan and Hupeh. Bull. Fan Memor. Inst. new ser. 1-2: 153-161, t. 1-2 (1948)

この二文は夫々原博士，小倉教授の御好意でみることが出來たので，こゝに御禮を申

上げる。

メリル博士のは短報であつて，前にのべた加州大學の調査とは別個に，南京の中央大學がアーノルド樹木園後援の下に 1947 年の秋に調査隊を出したことを述べている。その結果入手した標本や種子は英米の主な研究機關に配布したという。植物學的な記述は少ない。化石屬が先に發見され，その後生存種が見出された他の例としてノブノキ *Platycarya* に對する London の clayflora でそれより前に見つかつていた *Petrophiloides*, 同じくクルミ科で 1941 年に雲南で發見された *Rhamphocarya* が，化石としては歐洲から既に知られていた *Caryojuglans* であつた事實につぐ第三番目の例だという。

胡先驌，鄭萬鈞兩博士のは本式な論文で新らしい四川湖北の材料で記載し，圖版をつけ，その上で新科を設立し，加えて化石種の一切をメタセコイアにうつした Chaney 氏の學名を發表したものである。記載をよみ，圖をみればみる程ラクウショウ(*Taxodium distichum*)に外觀の酷似したものであることがわかる。しかし枝と果とを通じて確に十字型葉序の展開であつてその點でラクウショウとは全く違う。ただし葉序の點も，圖では雄の毬花序の上半分になるとどうやら十字型がくづれて，次の螺旋狀排列が始つているのではないかと思はれる圖が描かれている。記載にはその事は書いてない。もしも正直なスケッチだとすればこの雄の毬花序は小さいからこの變化をしているのを見落したのかも知れないが，葉序を氣にしている私にとつては甚だ大きな期待でもある，いづれにしても標本が手に入らねばお話にならない。

新らしい科 Metasequoiaceae Hu et Cheng l.c.: 154 (1948)は主としてこの葉序の點を主眼として設立され，Taxodiaceae と Cupressaceae との中間に位置するという。生きていた化石は *Metasequoia glyptostroboides* Hu et Cheng といひ，その自生地は四川省萬縣磨刀溪 (Mo-tao-hsi) と湖北省利川郡水杉壩 (Shui-sa-pa-valley) とにまたがる 60 km^2 の海拔 1100^m 前後の山地である。中國名を水杉，これは水松にも似ているところから付けた名であるらしい。Type tree は高さ 32^m の大木である。

化石種としては *M. macrolepis* (Heer) Chaney 以下 7 種の新組合せがでている。グリーランド，スピッツベルゲン，ネバダ等の下部白堊以降中新世迄の地層から出るが化石と生存種との全部を一括しても一種と見做したい程お互は近い連中であるようだ。

○ツマトリサウ（褄取草）の語源　（前川文夫）

この愛すべき山の草の語源については從來記るしたものがなかつた。最近武田久吉博士が「民俗と植物」(東京，三鷹町，山岡書店發行）という我々語源に興味を持つものにとつて珠玉篇ともいへるものを世に問はれたが，この中にはじめて語源を解明されている。即ち「その葉の緣が微かに紅色で彩られてゐる，即ち端（ツマ）取られてゐるからに外ならないのであらう」とある。デリケートな，しかし德川時代の本草家が却つて强